

連携教育通信

中野区合同研究「教育・保育部会」「運動遊び部会」特集

令和4年度も中野区内の就学前教育・保育施設職員対象に中野区合同研究を行いました。「教育・保育部会」「運動遊び部会」2つの部会で5月から9月まで各部会4回ずつ実施し、10月には合同で「報告会」を行いました。

<目的> 実践的研究をとおして区内の就学前教育・保育施設の連携・相互理解を推進し、中野区における就学前教育の質の向上に資する。

	<教育・保育部会>	<運動遊び部会>
テーマ	「園と家庭と地域が共に子育てを考える取組」 ～保護者への保育の見える化・情報伝達のあり方を切り口に～	「体を動かす楽しさや心地よさを味わい運動が好きな子どもを育てる取組」 ～「小学校低学年体づくりの運動あそび」へのつながりを意識して～
講師	和洋女子大学 人文学部 子ども発達学科 准教授 小山 朝子先生	白百合女子大学 人間総合学部 初等教育学科 准教授 石沢 順子先生
日程	5月26日 6月30日 7月21日 9月22日 10月20日	5月30日 6月27日 7月25日 9月20日 10月20日

教育・保育部会

<研究テーマについて>

・就学前教育・保育施設を利用する保護者については、楽しく子育てする方、子育ての不安や孤立感を感じている方、育児と仕事の両立に苦しさを感じている方、家庭で育児することに悩みを抱えている方など子育てに関するさまざまな背景をもっている。園と家庭と地域の連携により、子どもが豊かな生活体験を重ねることができるよう、具体的にはどのような取組が進められたかを分析し、その課題と今後の展開について着目した研究を行った。

<研究の方法>

- ①講師の先生の講義を受ける。
- ②保護者対応の事例について研究生が自身の取組をエピソード記録として整理する。
- ③事例の書き方・事例用紙の枠の使い方を講師の先生より指導を受ける。
- ④エピソード記録を総合考察することで、自身の保育を多角的に振り返り、学び合い、保護者への伝達のスキルを学ぶ。
- ⑤事例の書き方・分析の仕方を学んだところで、次の事例を記録をする。
- ⑥「保育の見える化・情報伝達のあり方の実践」の書き方について指導を受け、作成する。
- ⑦事例について研究生同士ポイントを伝え合う。



運動遊び部会

<研究テーマについて>

・体づくりの運動系には「体ほぐしの運動遊び」「多様な動きをつくる運動遊び」がある。「体ほぐしの運動遊び」は技術の向上を目指すのではなく、手軽な運動遊びを行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるようにする。①のびのびとした動作で用具を用いた運動②動作や人数などの条件を変えて、歩いたり走ったりする運動③リズムに乗って、心が弾むような動作で運動④伝承遊びや集団による運動遊び、がある。今回の研究は特に「体ほぐしの運動遊び」を意識して、できたできないにこだわらず楽しめる雰囲気づくりに取り組み、運動好きに繋がることを大切に研究を行った。

<研究の方法>

①講師の先生の講義を受ける。②運動遊びを取り入れることの課題や工夫について討議するとともに、研究生が自身の保育を振り返る。今後どのような遊びの環境作りをすればよいか新たな視点をもつ。③担当年齢クラスでグループに分かれ、グループごとに共通の視点を決めて取り組む。④机上の研究だけでなく、体育館での実技の時間も設定し、工夫しながら楽しめる遊びについて体験する。⑤学んだ遊びやグループ討議で得た遊びのヒントなど、自園で検証し、事例を作成する。⑥各自の事例を基に、さらに検証や考察を重ね研究を深める。



講義



グループ討議



実技



報告会 <10月20日 中野区産業振興センターにて>

合同研究報告会を両部会合同で行いました。研究生50名を6グループに分け、それぞれがグループ内で自身の事例を報告しました。

「教育・保育部会」の事例は、エピソードに“目に見えた事実”“保護者の気持ち・その変化”“保育者の気持ち・その変化”に整理し、時系列で気持ちの変化を赤裸々に記録していきました。その報告に共



感し、頷きながら聞く研究生もいました。1事例目で分析の仕方を学び、2事例目で「保育の見える化・情報伝達のあり方の実践」の書き方を見て「保護者対応の壁にぶつかった時、この方法をやってみたい。」という意見もありました。「運動遊び部会」の事例報告は遊びに使う道具や子どもたちの取組の様子をプリントして見せながら報告する研究生も



いて、「園に戻ったらすぐにやってみようと思う。」という感想や、「狭い空間を使っての工夫」に「家庭でも親子で遊ぶことができるので保護者にも伝えよう。」という声が聞かれました。



講師の先生より

- ・保護者がやりたいと思うことは、子どもたちもやってみようと思う。
- ・「やってみて楽しかった。」「幅が広がった。」という意見や、他の研究者の報告に「自分も実践してみたい。」との声が聞かれたのは嬉しい成果だと思う。
- ・保育者はやりやすい遊びを見つけたり、子どもが喜んだらそれでいいのではないかと考えてしまいがちだが、軸には「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」があり、それを広げていく活動にする必要がある。
- ・自分の取組から逃げないこと。諦めてしまうと傲慢な保育になってしまう可能性がある。紙面にまとめるのは大変だが、保育を充実させるためにも大切に行っていってほしい。

